

折衷主義をめぐって

野田俊作

要旨

キーワード：

日本の多くの心理臨床家は折衷主義者であり、フロイト心理学やロジャース心理学を基礎にして、交流分析だの行動療法だの、ゲシュタルト療法だのバイオエナージェティックスだの、内観だの森田療法だの、新旧東西大小の心理学諸流派をとりまぜて、つぎはぎ細工で治療をしてゆきます。しかし、私はその様なやりかたにはまったく同意できませんし、同意できないどころか理解すらできません。

折衷主義は、私にはスキヤキにゼンザイを混ぜて食べるように思えて、いささか気持ちが悪いのです。正統のフロイディアンやユングアンたちも、折衷主義にたいしては、同じような感じを抱いているのではないかしら。

よく考えると、折衷ということは、ほんとうは不可能なのだと思います。アドレリアン・カウンセリングとかロジェリアン・カウンセリングというものは存在するけれど、その混合物は、アドレリアン・カウンセリングとロジェリアン・カウンセリングの折衷ではなくて、実は折衷派という新しい流派であって、その構成要素になった諸流派とは独立の一派だと考えるべきではないでしょうか。自動車の部品と飛行機の部品とを使ってモーターボートを作ることができますが、それは自動車でも飛行機でもなくてモーターボートであるように。

カウンセリングとはなにかというと、まず治療状況の定義のしかただと思います。ところが、たとえば、フロイト的な治療構造は、アドラー的な治療構造とは絶対に折衷できません。その二つを混ぜ合わせたものは、リンゴジュースとオレンジジュースを混ぜ合わせるとリンゴジュースでもオレンジジュースでもない一種のミックスジュースに変身するように、もはやそのどちらともよべません。またその二つの中間というようなものは、リンゴとミカンの中間というようなものが存在しないように存在しえませんが、

第四回日本アドラー心理学会総会の基調講演でも話したのですが、最近、さまざまのきっかけがあって、治療技法と治療理論とメタ理論という3つのものの区別と、治療という場でのそれらの相互関係について、あれやこれや考えております。

まず考えなければならないことは、最初にあるものは治療構造であるということです。フロイトの治療理論（たとえば転移・逆転移理論）とメタ理論（たとえばリビドー論や心的装置論）は、フロイトというパーソナリティと上流夫人のヒステリー患者という対象との間の、閉鎖的な疑似親子関係的状况という治療構造がまずあって、そこでのできごとから帰納されて出てきましたし、アドラーの治療理論（たとえば横の関係）とメタ理論（たとえば目的論）は、アドラーのパーソ

ナリティと問題児とその親たちという対象との間の、オープン・カウンセリングという開放的交友的状况という治療構造から生まれてきたものであることを忘れてはならないと思うのです。

治療者と患者とその関係のあり方という治療構造がまずあって、そこから次に出てくるものが治療理論です。治療構造が指定されると、そこでおこる人間関係はある程度決まってしまうので、それを観察し体験して組み立てられる治療理論もだいたい決まってしまうと思うのです。フロイト的な治療状況では転移・逆転移理論はある程度は必然的に出てきてしまうだろうし、アドラー的な治療状況では縦の関係と横の関係の対比はいやおうなく意識されるようになります。

いったん治療理論が出てくると、「人はおのれの知っているものを見いだす」という西洋のことわざそのままに、治療構造はますます治療理論を証明する事実が出てくるような方向に傾いてゆくだろうと思います。こうして、はじめはそれほど違わなかったであろうフロイトとアドラーの治療構造と治療理論とは、今ではまったく違ったものになってしまいました。

今日では、アドラー的な治療構造とフロイト的な治療構造とはたいへん違ったものであるので、アドラー的な治療構造の中ではフロイト的な転移・逆転移理論はふつう不必要ですが、それでも、フロイト的な治療構造の中ではきっと必要だろうなどと思います。私はフロイトの治療理論を否定する気はありません。あれはあのような治療構造をとるならば、きっと観察可能な事実にもとづいた理論だろうし、事実を説明し整理するために必要なのです。しかし、われわれの状況では転移や逆転移というような現象を観察する機会はあまりないし、したがって転移・逆転移理論はあまり役に立たない。われわれの状況で役に立たないからといって、彼らの治療理論が誤っていることにはならない。われわれの治療理論だって、彼らの治療構造の中ではおそらく役に立たないだろうから。

治療理論の次にメタ理論が出てきます。これは直接の観察にもとづくものではないし、実際には検証不能の説明理論です。つまり、一種の妄想体系です。妄想的であるだけに、これは譲れないのです。治療理論は、これよりも実証的なだけに譲りやすい。つまり、フロイトの治療理論は、あの治療構造を考えるならば、認められなくもないのです。でも、あの治療状況であっても、あのメタ理論が必然的だとは私には思えません。転移や逆転移はたしかに存在するかもしれないけれど、イドやリビドーが実在するとは思えない。そこでおこる大部分の出来事はアドラー心理学のメタ理論を使っても説明できそうに思います。

しかし、一方フロイト的な転移・逆転移状況の中でおこるすべての出来事をアドラー心理学のメタ理論で説明することはたぶんできないだろうとも思います。なぜなら、アドラー心理学のメタ理論といえども、治療理論ほど直接的にはではないにせよ、アドラー心理学の治療構造から生まれたもので、それ以外の状況ではそれほど有効であるとは思えないから。

いったいなぜメタ理論というような妄想体系が必要であるのか。私は、メタ理論は絶対に必要だと思うのです。治療状況の中では、メタ理論は、たとえ妄想体系であったとしても、少なくともとても便利です。転移・逆転移状況なり横の関係なりという治療理論が用意してくれる川に、解釈投与とか助言とかいう治療技法の渡し船を浮かべて、メタ理論にもとづくメッセージを荷物として乗せて患者に送り届けるのが治療だと思うのです。

たとえば、治療者にたいして感情的になっている患者にたいして、フロイディアンなら「それと同じ感じをあなたのお父さんにたいして持ったことはありませんか？」というような解釈投与をするだろうし、アドレリアンなら、無視するか、あるいは「あなたは私に何をしてほしいがっているのですか？」と解釈投与するか、あるいは「私にしてほしいことがあったらことばでおっしゃってくださいませんか？」と正対的に助言するかもしれません。これらの行動を分析するならば、解釈投与とか助言とかいうのは技法であり、それらを支える転移・逆転移状況なり横の関係

なりという基本的な態度は治療理論に由来し、メッセージの内容は、感情に関するメタ理論、すなわち、フロイト心理学なら防衛理論、アドラー心理学なら使用の心理学、に由来するものです。

メタ理論がいくらさんくさくても、それなしでは実際の治療はなりたない。山の中を地図なしで歩くのが危険であるように、メタ理論なしで治療をすると道に迷います。しかしこのことはメタ理論の科学としての正しさを保証する根拠にはならない。山の地図は山では便利だけれど都会では使えない。メタ理論は、特定の治療構造の中での地図ではあっても、人間精神の地図ではない。一部の書齋心理学者たちのように、フロイト派やユング派のメタ理論をあたかも科学的真理であるかのようにふりかざして治療室外の一般社会の出来事の説明に使うのは、文学としては面白くても、心理学としては暴挙であると思います。

メタ理論が山の地図であるならば、治療理論は空模様や岩場の様子などの現場を観察する方法の知識です。そして、技法は実際の歩き方や道具の使い方です。

さて、第3の要素である技法は、治療理論やメタ理論ほどは治療構造に縛られていなくて、かなり自由に他派の技法を借用できるように思います。たとえば私自身、今でもアドラー心理学の治療構造の中で脱感作などの行動療法のテクニックを使うことがないではありません。しかし、これは、私が行動療法の治療理論やメタ理論を受け入れたことにはなりません。私がそれを使うのは、行動療法家がそれを使うのとはまったく違う文脈の中ですし、またそれにまつわる条件反射などの行動療法のメタ理論を私はまったく信じていません。治療技法は、ある程度は治療理論やメタ理論と独立に輸入できます。しかし、これは借用ではあっても折衷とはいえないと思います。中華料理に西洋伝来のケチャップを使ってもやはり中華料理であるようなものです。中華料理を中華料理であらしめているものは、中華料理の論理であって材料ではないのです。

借用や折衷についてまとめると、治療理論の借用は治療構造を保っているかぎりは不必要ですし、無理に借用することはおそらく破壊的な効果しか持ちません。技法の折衷はあるいは可能かもしれないが、治療理論の折衷は、たとえ可能であっても建設的ではないと思います。ではメタ理論についてはどうか。メタ理論の借用や折衷はまったく不可能だと思うのです。というのは、メタ理論は妄想体系であり、その一部でも変更すると全体の構造が変わってしまうシステムだから。

そうすると、心理療法学の学派とはいったい何か。メタ理論か治療理論か技法論か。昔はメタ理論がアドラー心理学だと思っていました。しかし今は治療理論がアドラー心理学だと思っようになってきています。極端なことを言えば、横の関係とか開放性とか積極的援助とか勇気づけというようなアドラー心理学の治療構造さえ完全に成立しておれば、技法が何であれアドラー心理学だし、メタ理論もある程度いいかげんでもかまわないんじゃないかなと思うくらいです。これは、逆を考えるとよくわかります。アドラー心理学のメタ理論と技法とを完全に持っていても、たとえば横の関係ひとつがなければ、それはアドラー心理学ではないと思うのです。

アドレリアンの中にも折衷主義者がいて、その人たちはアドラー心理学にたいして半身にかまえています。しかし、このことを非難する資格は私にはありません。アドラー心理学は誰の私物でもなくて、人類の共有財産であるからです。それゆえ、アドラー心理学をどのような分脈の中でどのように使おうが、それは個人の権利です。しかし、他の心理学と折衷する方が、純粹のアドラー心理学よりもどれだけ優れているのかを、一度検討してからにしてほしいのです。

フランス料理屋へ行って、シェフが丹精こめて作った料理に、持参の中華スープをかけて食べたとなると、シェフは怒るでしょう。アドラー心理学を他の心理学といたずらに折衷するのは、これとほぼ同じくらい馬鹿げた行為だと、私は思ってしまうのです。思ってしまうのですが、あ

えてそれをとがめようとは思いません。ただ、小さな声で、「この店の料理はそれだけで食べた方がおいしんですよ、ムシュー」と言ってみるだけのことです。

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載